勢をあげた。

関東詳議会に相應じたものは京都及神戸である、京都聯合会はもとより左傾派であり、殊に其幹部が除名せられむとする形勢に在るから万一中央委員会が上記六名の除名を可決せば、断然総同盟を脱退すべき決意を示し、神戸聯合会も亦三月廿五日の大会に於て、之に倣みする旨明にした。

九州聯合会の向背は両派の勝敗の岐る所であった。

従つて左傾派は山本懸義、右傾派は藤岡文六をして極力之を勧かさしめむとしたが、決局除名反對に決した。

然し之れは山本の成功と云はむより、寧ろその中心人物たる浅原健三と鉱夫総聯合會の加藤勘十との関係に基くと解すべきである。

即ち鉱夫総聯合會は個人除名に反對し、もし乖離救ふべからずんば同志相依りて新たに総同盟を解体し、むしろ一たん総同盟を解体し、九州聯合国体を組織するに如かずとの見解を持し、

今は之と歩調を一にすることにしたのである。

四、第一回中央委員会

三月廿七日総同盟中央委員会は大阪市西区の大阪聯合会事務所に開かれ、会長(鈴木)主事(西尾)及十一名の中央委員出席して、既述中村、鍋山、辻井、山本、松浦、後辺六名除名の件につき凝議したが、結局除名八、反対五で、除名説は規定上の必要数たる総数の三分の二に達せずして敗れた、両派の主張及其の支持者は左の通りである。

イ除名派、鈴木(会長)西尾(主事)松岡、望月、小泉(関西)堺本、笠島(関西)藤岡(東)

主張(一)外部勢力(山川均、堺利彦等)と策應し党中党を立てて総同盟を攪乱する。

(二)総同盟の方針たる現実化大衆化に一致せぬ。

(三)中央委員会が従来しばしば試みた忠言を容